11.災害列島で暮らす、災禍とめぐみの中で上手に生きる

日本列島はよく知られているように温帯モンスーン気候に区分されていることから、自然環境が豊かで、緑の山国です。四季があって雨量も世界的には多く、地形や地質の多様性も加わって様々な文化を生んできました。人によっては、神の国と呼ぶ人もいますが、おそらく自然と共生する人知を超えた何かを感じ取る感性豊かなものを持ち合わせているということだと思います。

日本列島は南北に長いこともあって、一斉にことが起きるということは少ないために、川の流れのように上流から下流まで様々な顔見せてくれるということです。よく言われる言葉に、前線という言葉があります、前線は常に変わる境界線を意味するものと思いますが、さくら前線、梅雨前線などというものがあって、日本列島の気象の豊かさを示す優雅な表現であると思います。

このような日本列島は、これまでも大きな地殻変動の影響を受けていて、いまの地形はその作用の成果であるということができます。それは列島が 4 つのプレートの上にあって、それぞれのプレートが活動し続けるプレートテクトニクスという大きな動きの中にいることで、大地震や火山噴火、津波、土砂災害といった自然の変化を経験させられています。

我々の暮らしで不可欠な水と農林産物と海産物は、この日本列島には豊かにそろっているという恵まれた環境が、自然災害と共存しているということもまた事実です。自然のサイクルが不調となれば、いまの技術で対応しても生活は成り立たないことになります。我々は極めて勝手で、このような大事なことは災害に遭遇してはじめて気づくという性格で、これを克服しないといけない永遠の課題かもしれません。自然の中で活かされているということを実感していた大昔とは異なり、現代は自然を改変した活動域に暮らしているために、自然災害の状況も大きく変化してきています。極端な言い方をすれば、本来は安全が確保されないようなところに生活するとか、安定が保証されないようなところを改変するという中で、インフラの損傷が発生すればグローバルに影響する時代で、危なかったら避難すれば済むということではなくなってきたということです。加えて、最近の気象の変化は異常が平常になる程に大きく変化し、それに伴う自然災害も規模だけでなくタイプが異なるものが発生してきています。被害に遭遇した人は、想定外だったとか、まさかここで、といいますが、実は自然災害には素因と誘因があるのです。その要因の一つが、土地の利用のやり方です。これまでは経験や聞き込みで利用していたものが、そのような根本的な情報が無視され利便性だけを求めて開発や造成するということが災害の大きな要因になっていることが少なくありません。どんな建物でも、どんな地盤でも杭等で支持さえすれば建設は可能です。しかし、地盤や自然地形は正直で、三つ子の魂を持っています。外的作用でその潜在化しているリスクが顕在化することで被害を受けることになります。地域知が大事であるといわれているのは、このようなリスクをあらゆる方法で収集して、分析評価して対応するという謙虚な姿勢が求められていることにつながります。リスクを知ることは、事前に想定できることもあり、回避につながる方策になることにもなります。